文化

相模原殺傷事件判決 辺見庸さんに聞く

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が、元職員の植松聖(さとし)被告に死刑判決を言い渡した。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

☆

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の上で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいけない」といった言わずもがなの前提が私たちの内面でとっくに破綻していたことを、あらわにしたからです。

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を選別する―。植松被告、私は「さとくん」と呼びますが、彼はそういう論理で重度障害者たちを殺していったとされている。裁判所は死刑判決を下しました。その瞬間に司法は「さとくん」と同じ論理に立っていることを、最も単純な形で証明しました。

私は「月」という作品で「世の中をよくしなければならない」と考える「園」の職員「さとくん」と、目が見えず歩行ができず、しかし自由に「おもう」ことができる入所者「きーちゃん」という人物をつくりました。きーちゃんは痛みの中で「なぜ、在るのか」と考え続けます。私たちが「存在してしまう」ことは、主体的にあるのではなく「気付いたらそうだった」という偶然によるものです。

―― 偽装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

―― 表出

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―そんな会社の事件は大いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳(しゅんげん)さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

判決が言い渡された3月16日、事件現場の「津久井やまゆり園」に設置された献花台の前で手を合わせる地元住民ら＝相模原市緑区

へんみ・よう 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの食う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼(め)の海」で高見順賞など。

社会の「本音」あらわに

極楽の文学を実践

「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳(しゅんげん)さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

―― 偽装

意志とは関係なく「在ってしまう」という実存について、私たちはとりあえず「そういうものなのだ」と引き受けるしかない。他人が「在る」「ない」を決めることはできません。けれど日本社会では長く強制不妊が行われ、今は出生前診断で「命の選別」をしている。「選別」の射程を広げれば、企業では人事評価で「良い社員」かそうでないかをより分けている。強い者と弱い者、美しい者と醜い者、「正気」な者とそうでない者…。あらゆる場所に優生思想が染みわたっている。

ところが日本社会は、重度障害者に優しいかのような偽装をしています。たまにテレビに登場させれば「ハートウォーミング」な文脈に回収してしまう。重度の障害がある人、その保護者が抱える重さはとてつもないもので、それに見合うリアリティーが番組には全く欠けています。

本当は自分の周囲から排除している人、見ないようにしている人々、忘れようとしている人たちを、「共生」「絆」などと軽々しく肯定する言葉だけはたくさんあります。それはおためごかしというものです。

―― 表出

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい―そんな会社の事件は大いくいを打ち込むような出来事でした。なぜなら、この時代と社会に静かに組み込まれ、巧妙に隠されてきた優生思想が表出したからです。その意味で「さとくん」は「社会的産物」であり、事件は「一人格の問題」ではない。彼をエキセントリックで例外的な人間だというふうに扱えば扱うほど、事件の真相からは離れていく。

「さとくん」は施設で働いている時、障害者を取り巻く暗い風景に傷ついたのではないか。それを自分で対象化し、消化することができなくなったのではないか。すさまじい暴力を発動させた背後には、社会が抱える優生思想があった。彼個人の属性によるものではなく、その暴力は社会にぴたりと同調していた。

「さとくん」は、暴力に突き進んだ時の論理を「そうではないのかもしれない」と保留することができなかった。何かを保留すること、抑制するには骨組みのしっかりした知性が必要です。それは「世間」や「社会」に同調せずに「個」として生きようとする態度にも関わる。生き方における峻厳(しゅんげん)さが問われることです。

死刑制度には、問われる罪に関わりなく、無条件で反対です。国家による殺人という意味では戦争と同じであり、それを容認することになる。死刑は「暴力を内包した国家」を成り立たせているものなのです。

俳句はいま … 関悦史

内田麻衣子第2句集「私雨」(ふらんす堂)は、育児の句も洒脱(しゃだつ)な諧謔(かいぎゃく)に満ち、べたつかない。

〈0歳のはだか尻頬カチョカバロ〉。カチョカバロはひもでぶら下げて熟成させるチーズ。乳児の肉感の意想外で清新な比喩であるだけでなく、音韻の愉(たの)しさが弾んだ気分をも引き起こす。〈母むしろおっぱいである日向ぼこ〉は逆に子から見た母の体で、諧謔が自分へも返り、日常即祝祭の境地。

〈旱あスナイフの生える子供たち〉など社会や文化を詠む句も、暗喩の鈍重さをかわしつつ情を乗せ、技法が立体的。

佐藤日田路第1句集「不存在証明」(俳句アトラス)も暗喩に富むが、肉体に発した生気が世界を変えていくダイナミズムが見どころ。〈脳味噌をざぶざぶ洗う春キャベツ〉〈城一つくれてやろうか鰯雲〉など、自我の押しつけに終わらぬ流動的な充実感に富む。

宮田應孝第2句集「空の涯」(ふらんす堂)はそうした己を巻き込むダイナミズムとは異なる、認識によって組み立てられた歓(よろこ)びが中心。〈名古屋晴関ヶ原雪京都晴〉〈合宿や裸足でチエロを弾く少女〉など、映像を言葉に変える作業自体の快楽に読者を引き込もうとする。

中村紅絲第1句集「種のある半球」(邑書林)は中村の師竹中宏に倣い、錯視や幻術の域にまで言葉で踏み込む。〈桃割って種ある半球無き半球〉のスケールの混乱、〈髪洗ふ処刑のごとく首のべて〉のまがまがしい幻視は現実無視ではなく、現実を組み替える試みである。

皆川燈第2句集「朱欒ともして」(七月堂)は架空・幻想に振り切った句材ゆえの、謎のない象徴性がときに痛切な高みを…った一つの花文…のか〉

木暮陶句郎第…治」(朔出版)…実そのままの…詠に抽象性を…感へと転じる。…の年の陶土を積…や〈美しき薬味…鰹〉は陶土や初…たま」や「美…い、静かな安息…これはさりげな…動詞「積み上ぐ…れ」のしなやか…る。

以上それぞれ…とも呼ばれる俳…関係について、…レベルで示唆を…いえる。

俳句

舘岡誠二(たておかせいじ)さん

久しぶりに春(4～6月)の選者を担当する。人生の喜怒哀楽の心の内を詠み、自然風土と人間味の深まりを感じられる作品を期待する。

誰にでも好不調はある。精神の若さで作句を持続し、俳味濃く作品に昇華してほしい。

投稿前の自作を再読し、安易ではないか、報告句ではないか確認を。読者文芸を道場とし、切磋琢磨(せっさたくま)したい。

詩材はいたるところにある。作者自身が見たり、聞

読者文芸 選者が交代します

さきがけ読者文芸の詩壇、歌壇、俳壇、柳壇の選者が交代します。期間は4月から6月までの3カ月間です。入選作と選評は4月2日から文化欄(短歌・俳句・川柳は毎週木曜日付、詩は原則として月、木、金曜日付)に掲載します。期間を通じての各部門の推薦作家と総評は6月下旬に掲載します。新たな選者期間の開始に先立ち、新選者に抱負や選考方針、投稿者への期待を寄せてもらいました。

雑記帳

◆俳句大会の参加者募集

俳人協会県支部は、5月17日午後1時から秋田市の協働大町ビルで開催する第30回俳句大会の参加者を募集している。選者は俳人協会幹事の長嶺千晶(ながみねちあき)さんら。原稿用紙に当季(春・夏)雑詠2句1組(何組でも応募可)を書いて小為替か現金書留で投句料1組千円を添える。

投句先は〒010―0802、秋田市外旭川字大畑58の4、佐藤景心方、俳人協会県支部事務局。4月6日締め切り。大会終了後、懇親会を行う。参加希望者は会費3千円を投句料とともに送る。

問い合わせは同事務局・佐藤景心☎018・868・0744

文化だ…

★秋田歴史研…

解読講座＝昼の…(日)、19日(…半から秋田市役…ス。夜の部が2…日(木)午後6…の旭北コミュニ…ー。初心者の見…合わせは事務局…8・839・7…

・戦争へ続く…

以下は近作…ない。勇気を出して投句してほしい。上達は後から付いてくるだろう。

◇

高校時代から短歌を始め、1950年に歌誌「寒流」に入会し石田玲水に師事。「海原(うなばら)」「寒鮒(かんぶな)」同人。県現代俳句協会、県俳句懇話会、県国際俳句協会各顧問。金子主幸「海程」新人賞、海程賞、海隆賞。現代俳句協会功労賞。巽巨詠子賞、県芸術文化章、県文化功労者。句集に「土性骨」「みどりの繃帯(ほうたい)」「冬の蜘蛛」「茄子の馬」など。

以下は近作2句。

・四月来る秋田地酒の上棟式

・春動く闇魔大王通ります

◇

詩人会会員。県現代詩人賞、秋田市文化選奨。詩集に「はるかな歌」「はるかな歌Ⅱ」(私家版)、「蒼の紋様」で表現する文芸であり、誰にでも気軽にできる。頭脳の活性化にもつながることから、新人の方の挑戦を大歓迎したい。

川柳を楽しむためには、五七五のリズムに慣れることが大切。そのためにはたくさん作ることが肝要である。初めから上手な人はいない。勇気を出して投句してほしい。上達は後から付いてくるだろう。

◇

け20歳で川柳…柳ずむむし吟…本川柳協会幹…話会顧問、五…化協会副会長…労者、東北川柳…県芸術文化章…知新」。

以下は近作…ない

・ふるさとの…人が好き

五城目町東…